

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	周 秋利
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 竹内正一の作品に見る「満洲」時代のハルビン —その表象と実像をめぐって—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	佐藤 利行	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	溝渕 園子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	衛藤 吉則	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	河西 英通 (本学名誉教授)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、在満日本人作家である竹内正一（1902～1974）が描いたハルビンを舞台とする小説作品を取り上げ、作品の中で描写される表象に着目して、歴史的な視点から「満洲」時代のハルビンの実像を検証したものである。論文は序章、第1章「竹内正一が描いたハルビンの日本人像」、第2章「竹内正一が描いたハルビンの中国人像」、第3章「偽満州国における白系ロシア人の信仰と現実」、第4章「竹内正一における国策文学の再考」、第5章「在満日本人における故郷意識」、第6章「ハルビンにおける植民者としての住民についての考察」、終章の全八章から構成されている。</p> <p>序章では、研究の動機・目的を論じ、先行研究を丹念に整理・分析して竹内正一とハルビンとの繋がり、「満洲日系文学」における竹内正一の位置づけについてまとめている。</p> <p>第1章では、短編小説「世界地図を借りる男」「友情」「寒暖」を取り上げ、そこに描かれた近代的消費社会としてのハルビンにおける底辺の日本人像を考察する。竹内はこれらの作品で日本人の若者の人物像を退廃的なイメージを強調して描き、そこには竹内の時弊を諷刺する思いが込められていると指摘する。</p> <p>第2章では、短編小説「白眠堂徑徂」「馬家溝」「孤児」を中心に、竹内が描いたハルビンにおける底辺の中国人像を考察する。「白眠堂徑徂」「馬家溝」では女性主人公を巡って竹内が形作る中国人像の多様性、「孤児」ではオリエンタリズムの観点から竹内が他者という立場で中国人像を描いていることを述べている。</p> <p>第3章では、短編小説「夏の日の戀」「復活祭」を取り上げ、そこに描かれる白系ロシア人の宗教的表象から偽満州国時代のハルビンにおける白系ロシア人についての分析を行っている。すなわち、戦時における一般庶民として無力感と苦難を描くとともに、白系ロシア人自身は偽満州国の外国人としての帰属意識を持っていたことを明らかにしている。</p> <p>第4章では、長編小説『哈爾濱入城』を取り上げる。当時の政府は「五族協和」を唱えていたが、小説に描写される人々の生活状況を見ると、実際には他民族間の協和を実現することが困難であったことが分かる。しかし竹内は在満日本人としての民族意識と使命とを覚醒させるために、この作</p>			

品を作ったのではないかとする。そこには時局下において、みずからの文学についての竹内の苦悶を見ることができると述べている。

第5章では、短編小説「故郷」「向日葵」「山裾の街」と長編小説『哈爾濱入城』を中心に、都市と農村という二つの空間における在満日本人一世と二世の故郷意識について考察する。「向日葵」「山裾の街」は国策文学として創作され、そこでは在満日本人一世の北満に対する郷土愛を育もうとする竹内の姿勢が見て取れるとする。他方、在満日本人二世を主人公として描く「故郷」『哈爾濱入城』では、二重のアイデンティティを持つ者としての故郷認識、自己認識の危機が迫っており、そこには同じく在満日本人二世としての作者竹内正一の心象が投影されていることを指摘する。

第6章では、短編小説「風俗國課街」を中心に、多様なハルビンの表象と在満日本人について考察する。ハルビンにおけるロシア式の国課街の表象を浮き彫りにすることで、白系ロシア人が自らの文化をハルビンに移植したことを示している。一方、日本人は次第に異国感という思いを懐くようになってゆく。こうした民族的・国家的アイデンティティクライシスに陥った戦乱の状況にあつて、支配民族・被支配民族に関わらず、生命・自由への権利を自ら得ることができなかつたことを描くという点において、竹内の戦争への批判と反省とを読み取ることができると言う。

終章では、本研究をまとめ、今後の課題について述べる。

本論文は、在満日本人作家である竹内正一の作品群から、そこに描写されるハルビンの表象を通して竹内自身の文学の特質を探り出そうとした意欲的な論文である。竹内は日本人という支配者側の優位な立場から、中国人・白系ロシア人を観察すると同時に、人道主義的な心遣いを持って被支配者への同情の思いを作品に表した。支配者側にある竹内は、敢えて「傍観者」という立場から支配される側を描くということによって、そこに竹内自身の社会への批判と戦争への反省が表出されているという指摘は、竹内文学の特徴の一端を指摘したものであり、今後の研究の発展が期待される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)